

『峨眉山月』 李白

”李白の叫びが聞こえる“

今に伝えられる峨眉山月の歌

杜甫とならぶ中国を代表する詩人、李白の作であるが、彼の特徴であろうか。どういう状況で作詩したかを作品に述べたがらないせいもあって、制作年代の確定しにくい作が多い。李白が晩年の五十九歳の年に反乱軍に加わったことで南方の夜郎に流される途次、三峡の辺りに滞在した時の作ではとの説も一部あるが、従来の李白研究者達の説によると、李白が少年時代から住みなれた蜀の地を離れて、長江を下る旅に出た時の作であろうと概ね一致しているのだ、通説に従って李白二十五歳頃の作としたい。したがって若き李白が抱いて家郷を出立した時、峨眉山にかかる月に惜別の思いを寄せた詩とみたい。

李白が詩に託した風景と想い

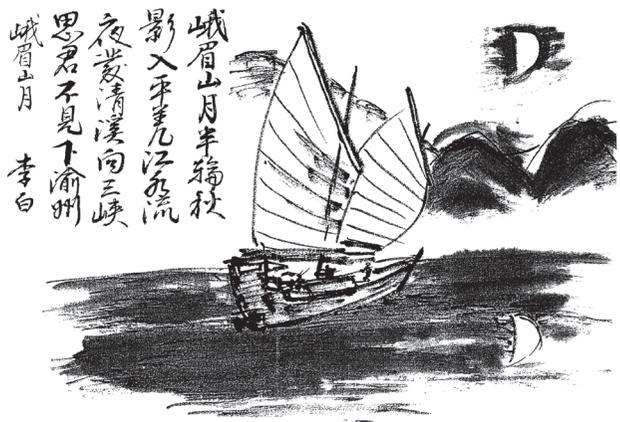
峨眉山にかかる半輪の秋の月。

ゆらぐ平羌江の川面に

その影を落しながら、ともに流れてゆく。

舟は夜半に清溪を発って

三峡へと向こう。



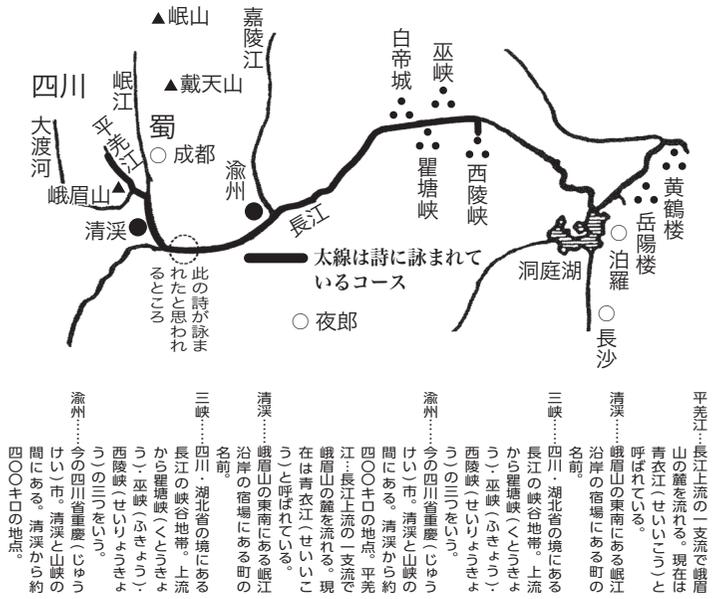
峨眉山月半輪秋  
影入平羌江流  
夜半清溪向三峡  
思君不見下渝州  
峨眉山月 李白

君よ！あの月よ。ふたたび  
眺めやりたいと思っても  
その姿はない。  
月を見ぬまま渝州に下る  
のだ。

誕生から蜀を出るまでの李白

李白は長安元年(七〇一)に生まれた。母が太白星(金星)を夢に見て生まれたので字を太白としたと伝え

られる。出生地は二説、西域の條支(異民族)・四川省の青蓮郷(漢民族)があるも、どちらと決めるにも確実な根拠はない。いずれにしても五歳頃に蜀に移り住み、そこで少年から青年時代を過ごした。幼いうちから古典教育を施され、その文才を発揮し、時の人物蘇頌をして『此の子天才英麗なり・・・』といわしめた。又反面剣術を好み、任侠徒に加わり人を殺めたこともあったという。李白二十五歳に至るまでの暮らし方において注目すべきことは、自ら仙人世界に憶れ、有名な道教徒、東嶽子を訪ね岷山にこ



を及ぼしたといえよう。そして二十五歳のとき自己の見聞を広め、いつか官途について経世の才を発揮する手づるを求め、いよいよ故郷の蜀の地をあとにすることを決意した。

**固有名詞が活かされた詩の特徴と溶け込んだ情景**

この詩の見どころの一つは僅か二十八字の中に峨眉山、

もったり、  
 戴天山の道  
 士らと交遊  
 したことで  
 ある。また  
 当時道教の  
 聖地とされ  
 ていた峨眉  
 山にも登っ  
 ている。若  
 い時代にお  
 けるこれら  
 のことがの  
 ちの李白の  
 思想形成に  
 重大な影響

平羌江、清溪、三峡、渝州と五つの固有名詞が入っているところにある。それにも拘らず不自然な感じは全くない。むしろ読者には峨眉山の麓の平羌江に映る美しい月の影と、清溪を発して舟は渝州へ渝州へと下ってゆく様子が彷彿とされる。

峨眉山は今の四川省の中央部に位置する成都市から南へ約百キロ程の所に有る。平羌江は峨眉山の北側から流れてきて山のみ東に当たる岷江という川に合流する。そこから四十キロほど南下した所が清溪である。今もここは清溪鎮という地名が残っている。そして清溪より岷江を更に南へ下ると長江と合流することとなり、この江こそ李白がこの詩における目的地とする三峡への本流である。峨眉山から三峡までの距離は八百キロともいわれており、ともかく向かわんとする渝州までは、峨眉山から三峡までのほぼ中間点と考えてよい。

**終生忘れなかつた峨眉山の月**

李白は故郷蜀を出て以後、長い遍歴の生涯にあって再び帰る機会をもたなかったが、峨眉山に懸かる月の光はもとに忘れがたいものであったことが、残された数首の詩によって窺える。うちの一首であるが李白は晩年湖北省の武昌に滞在していた時、同郷の僧が都に上るのを送別する十六句の長詩「峨眉山月、蜀僧晏の中京に入るを送る」と

題する詩を作っており、その中で「我、巴東三峽はとうさんせつに在りし時、西のかた明月を見て峨眉を憶う」と詠い出している。老いた李白が若き日を回想し自らの目に映じた自然の姿を、ひたすら客観的に描いているところに、却って峨眉山の月に万感の思いが込められていることが窺える。

## 鑑賞と研究

「峨眉山」は成都市の西南に位置する名山で標高三、〇九九メートル。蛾の触角のような形で峰が対立することからこの名があるという。「平羌江」はその山のふもとを流れる川。「峨眉山」からは峻険な高山を、「平羌江」からはゆったりした流水を、「清溪」からはすがすがしい雰囲気、「三峽」は舟旅の難所であると共に、実社会へ乗り出す李白の前途への不安を連想させるなど、固有名詞の文字が与える印象を巧みに生かしている。

全体の鑑賞として、この詩は峨眉山にかかる月（故郷に残した恋人）に心を残しつつも、希望と不安を胸に長江を下る舟旅の情を詠じたものである。前半二句では山の上にかかる秋の月の光が川の水に差し入る情景を凝縮して述べ、後半二句は峨眉山の月に心引かれる心情を詠じている。当時の人々には月を仰いで昔の偉人や遠く離れている家族を偲び、又月に心を託すという習慣があった。結句の「君」は月を擬人化した表現であろうが、「峨眉」が美しい女性

の眉を連想させることもあって、李白が離郷の際に別れを告げた女性の存在を暗示したものと解される。李白は数多くの望郷の詩を残しているが、こののち一度も故郷の蜀の地に足を踏み入れていない。李白五十九歳の冬、永王璘えいおうりんの乱に連座し、夜郎やろうに流されたとき、三峽を遡り白帝城の下まで来たが恩赦にあうとすぐ長江を下っている。何か李白の心にかかり、故郷に入るのを躊躇ちゅうちよさせていたのだろうか。一つの謎である。